



れきけん ニュースレター

vol.12



- 特集：「ちいきしげん研究座談会inあさひ」に参加して
- F.L.Wright Tour Eastに参加して
- 空沼小屋復活！
- おすすめ・れきけんBook

■れきけんニュースレターへの寄稿をお待ちしております。

会員のみなさまにお送りしている、れきけんニュースレターに会員のみなさまの活動や取り組み、催し物のご案内を掲載しませんか？ 次回の発行は平成29年12月です。詳しくは7月8日にお送りしているメールでのご案内をご覧ください。

●特集：「ちいきしげん研究座談会inあさひ」に参加して

士別市朝日町に残る「旧佐藤医院」を知っていますか？ 2008（平成20）年から地域の拠点として、「あさひ 地域の資源を活かす会」（以下、活かす会）の塚田さんたちが保存活用している、1930（昭和5）年創建の病院跡施設です。建物もちろん良いのですが、守りたいと思った活かす会の皆さんと所有者さんとの関係性がとても良くて、訪れる度に素敵な気持ちにさせてくれる場所です。

さて、その建物で7月22日14時から、「ちいきしげん研究座談会inあさひ」（主催：活かす会）と題して、NPOれきけんの角先生を座長に、実際に利活用に取り組んでいる方々が集まりました。

ゲストスピーカーは、大野真一郎さん（士別市市街地で自邸である大野邸の保存活用に取り組む）、川島里美さん（下川町で旧共立木材事務所を活用する「共立トラスト」事務局長）寺島栄一さん（上士別町の旧岡崎医院の保存活動をした。建物は解体されたが、部材を丁寧に保存している）、NPOれきけんから東田、そして活かす会代表の塚田郁子さんです。

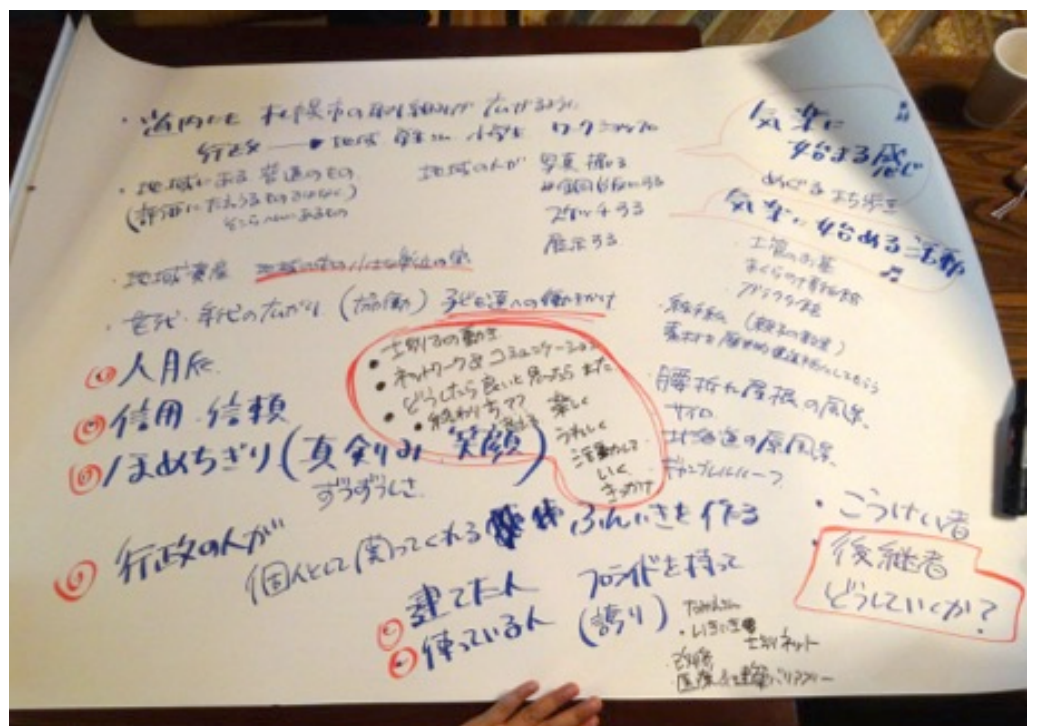
当日は、ゲストスピーカーから活動内容を報告した後、ファームあるむさんの美味しいシフォンケーキと寺島さんの木いちごジャム、梨の花さんのフェアトレードコーヒーで、ブレイクタイム。その後は、参加者の皆さん全員で、さまざまな課題や活用方法について語り合いました。

残す活動に必要なこととしては、人脈、信用と信頼、世代の広がり、ネットワークとコミュニケーション等の意見が出てきました。そして分かったことは、全ての建物それぞれに、所有者がいて、残したいと思う人がいて、活用したい人がいて、地域との関係性や取り巻く人間関係の全てが違っているということ。けれど、人の想いや繋がりから何かが生まれて、根っこの部分はしっかりプライドを持ちつつ、「気楽に、楽しく、嬉しく、長く」活動していけるのが良いよね～という結論になりました。そして、お互いに困ったり疲れたりしたら、気軽にSOSしようよ！ということでした。

3時間の長丁場もあっという間で、また必ず会おうねと固く約束をして、閉会しました。NPOれきけんメンバーは、そのまま旧佐藤医院に宿泊させていただき、楽しい夜を過ごしました。そのお話は別な機会に（笑）。

最後になりましたが、活かす会の塚田さん、皆様、大変お世話になりました。この場をお借りして、お礼申し上げます。

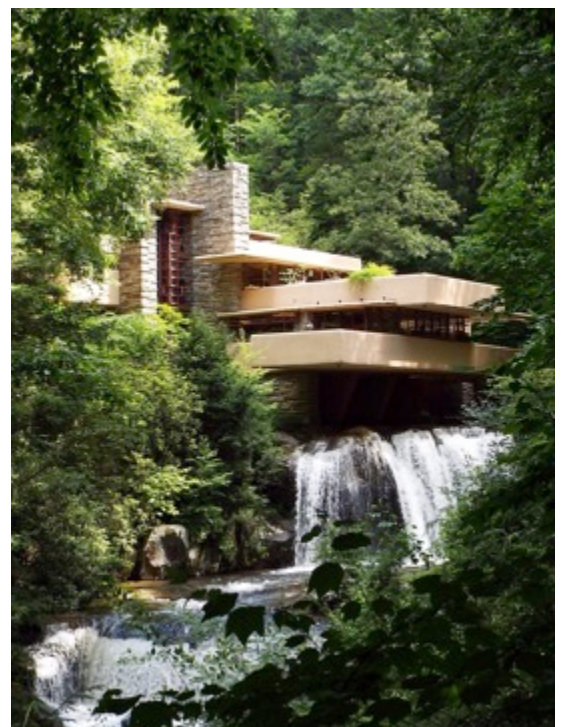
本当に、ありがとうございました。（東田秀美）



●F.L.Wright Tour Eastに参加して

6月21～28日にかけて「フランク・ロイド・ライトツアー イースト」に参加してきました。40年ぶりのアメリカ訪問でしたが、今回はこれまで行ったことがないタリアセン・イースト、ジョンソン・ワックス本社、オークパークのライトスタジオ、落水荘などの見学に誘われての参加です。結婚40周年ということもあり家内同伴。遠藤新の孫にあたる遠藤現さんを団長に、添乗員を加えて総勢30名の団体で、21日は成田からシカゴ空港に飛び、ウィスコンシン州マジソン宿泊。22日タリアセン・イーストを訪問。タリアセン・イーストはフランクロイド財団が運営している施設で、ビジターセンターで観光バスから赤い専用バス2台に分乗し、フェローシップ建築群(1932-1952)まで送迎。風車(ロミオとジュリエット、1938)、スプリング・グリーンタリアセン第三(自邸、1925)までは徒歩で見学。自邸のリビングや寝室、ステンドグラスに大感激しました。ビジターセンターのライトショップでお土産物色。ここでの収益が施設持続の一部に充てられているそうです。マジソンに戻りユニタリアン教会見学後、ミルウォーキーに移動。翌23日ミルウォーキーでアメリカン・システム・アパートメントの小住宅作品6棟を地元ガイドさんの案内で見学しました。次はウィスコンシン州ラシーンのジョンソン・ワックス・ビル(1936、1951)と研究棟ヘリオラブ(1944)を見学。残念ながら内部写真は禁止でしたが、近代建築史図集で何度も見た中央執務室の樹木状独立柱やパイレックスガラス管のディテールに間近に接することができ、またライト設計の事務家具にも実際に座ることができました。その後イリノイ州リバーフォレストのウィンズロー邸(1894)を40年ぶりに見学、さらにオークパーク内の自邸(1889)、スタジオ(1897)の内部を思う存分堪能しました。24日シカゴ大学内のロビー邸(1906)を見学後、IIT(イリノイ工科大学)のミースのクラウンホール(1945)やシカゴ市内のレーク・ショア・ドライブ・アパートメント(1951)などを見つつシカゴ空港からピッツバーグ空港近くのホテルへ。翌25日は朝6時出発でペンシルヴェニア州ミルランの落水荘(1935)に向かいました。通常開館前の特別ツアーで、写真撮影も自由にさせてもらい、憧れの空間に2時間以上も浸ることができ大満足。1963年に土地とともに西ペンシルヴェニア保存協会に寄贈され、現在は同保存協会がガイドツアーを実施しています。夏休みということもあって、順番待ち(10名ずつのツアー)の観光客でごった返していました。もちろん、有名なアングルの外観もバッチリと撮影できました。その後ピッツバーグからニューヨークへ。26日は朝からニューヨーク近郊のプレザントビルにあるユースニアン住宅のウィズリー邸(1949)を訪問。今年93歳になるウィズリーさんがライトの思い出とともに建設経緯を説明してくれ、自宅の隅々まで自由に見学させてくれました。全てが創建時の状態を保ちつつ、心地よい空間が維持されており、午後のグッゲンハイム美術館やニューヨーク近代美術館見学の感動を凌ぐほどの体験でした。27日はニューヨーク空港からシカゴ空港経由で一路成田へ。

機中泊で13時間。28日16:00過ぎに成田に到着しました。いずれ、ツアー報告会を企画しており、詳細が決まり次第お知らせします。(角 幸博)



●空沼小屋復活！

倒壊の危機にあった「空沼小屋」の修復工事が昨年完了し、今年7月2日、スイス在日大使、三笠宮彬子女王殿下も参加され、再会記念式典が無事執り行われました。

「空沼小屋」は、故秩父宮さまの希望で建築され、市民や北大生に約90年間も愛用されてきた空沼岳（札幌市南区）中腹の山小屋です。基本設計はスイス人建築家マックス・ヒンデル、実施設計図には北海道帝国大学営繕課が携わったと考えられ、工事は伊藤嘉悦組が請負1928年に完成。本ヒュッテ（「空沼小屋」）はテイネパラダイスヒュッテ（1926年竣工）、ヘルヴェチアヒュッテ（1927年竣工）と共に、ヒンデル設計のスキーヒュッテ3部作の一つであり、この一連の作品はその後のヒュッテ建設機運に大きな影響を与えました。

建築概要は、梁間24尺×桁行21尺の主屋に24尺×4尺の下屋を付属した2階建てのヒュッテで、1階16.67坪、2階14坪、延べ30.67坪。戦前期のログ工法の数少ない実施例です。完成の翌1929年1月22～25日まで高松宮さまはヒュッテに宿泊、24日に「空沼小屋Soranimakoya」と命名されました。1930年2月11日から一般開放され、1947年2月17日北大に寄贈、現在も北大が所有しています。古くは札幌の女学校の遠足の地ともなっていたそうです。その後1981年5月、小屋の傾きによって一般宿泊者の使用を禁止し、1981年11月と2007年9月に実施された有志による応急処置を経て、今回の本格的な修復に至りました（本修復も、有志の資金に寄るものです）。

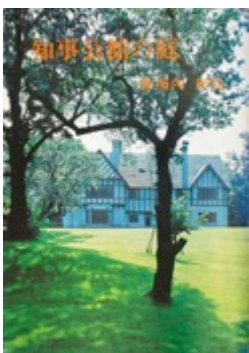
今回の修復は、倒壊を防ぐことを第一義とし、曳屋で土台から上の建物全体を一旦水平移動させた後、元の位置の地中にピンファウンデーションという基礎を新設し、基礎束と土台を更新後、建物を元の位置に戻しました。また、これまではお隣の万計山荘のトイレを利用していたのですが、万計山荘も老朽化してきている為、今後万計山荘がなくなったとしても空沼小屋単独での利用が継続できるよう、バイオトイレを新設しています。合わせて、外壁の痛みの激しいところは補修を行いました。施工は伊藤組土建さんです。尚、今後は登録有形文化財の登録に向けた活動が続けられる予定です。今回の修復は決して十分なものではありません。次世代にさらなる修復を託せるよう、沢山の方々に復活した「空沼小屋」を訪れていただき、これからの世代の方々にも「空沼小屋」に親しみを持っていただけることを願っています。

空沼岳は、登山口から頂上まで約8km、緩やかな登山道を歩けば片道3時間半ほどの人気の初心者登山、ハイキングコースです。皆様も是非訪れてみて下さい。（照井康穂）

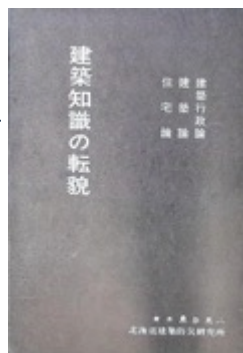


●おすすめ・れきけんBook

～れきけんアーカイブ田上義也蔵書より～



- 知事公館の庭
- 著：堂垣内尚弘
- 発行所：入江好之



- 建築知識の転貌
- 著：熊谷英二
- 発行所：北海道建築防災研究所



- 建築と人生
- 著：内藤多仲
- 発行所：鹿島研究所出版会

（橋本敏明）